

た東洋學者がゐないから廣く諸國の學者の援助を請うて、整理の完成を急いで居る有様である。

七 遺物の管理〔下〕

佛蘭西では文書は巴里のビブリオテーク・ナショナル、美術品はルーブルの博物館内に、特に數室を劃して陳列してある外、ギメー博物館にも一部分は藏せられてゐる。親しく探檢の事に従事したペリオ氏自身が、世界に有名な東洋學者であり、漢學の造詣も深いので早くも文書類に一應の整理が出来て、目錄も備はり、自由に圖書館内で閲覽するを得るやうになつて居る。但しペリオ氏の整理の手を離れてから、破損文書の修理を加ふるに當り、内容には全く無頓着の經師屋が、兩面に記した貴重な文句の一面を、裏貼りで全く讀めぬやうにしてしまつたりして居るものゝ少くないのは少からず残念に思はれる。

獨逸の蒐集品は伯林のフェルケルンデ博物館に藏せられる。此の博物館を訪うて、特に他と異なる著るしい印象を受けることは、他では片々になつて大して多くもなく存する中央亞細亞の壁畫が、こゝでは元ありしまゝに壁立して、觀者をしてさながら中亞の佛洞の前に立つて居るかの如く感ぜしめることである。畫面により、壁の状態によつて、適宜の大きさに切斷して携へ歸つた苦心談を、自分は直接ル・コック氏から聞いた。

こんな大袈裟な、根本的な蒐集の仕方は外では見られない。こゝにも獨逸風の特徴が現れて居ると謂はうか。ただ獨逸の探檢家は燉煌には行かなかつたが爲に——ル・コック氏はこゝにも行かうとしたが、事情の爲に果さなかつた——書物の蒐集に於ては英佛のやうに纏つたものはなく、沙中の廢墟から蒐め得た斷簡零墨に止まる。されど